

遠隔講義システムにおける教育の可能性

ー全学教育人文社会科学科目「社会と歴史」授業実践研究から考えたことー

大学教育機能開発センター

井手 弘人

ide@redc.nagasaki-u.ac.jp

はじめにー「ながさき IT フェア」における遠隔講義の経験

筆者は2003年10月17日(金)午後2時30分から4時まで、筆者が担当する全学教育人文社会科学科目「社会と歴史ー長崎大学史からみる日本近現代ー」にて、総合情報処理センター第2端末室と長崎駅前「かもめ広場」を結んだ遠隔講義実験を公開する機会に恵まれた。参加した学生は、総合情報処理センター第2端末室側45名(教育・経済・医・工・環境科学部の1~4年生)長崎駅前かもめ広場前3名(経済学部の1年生)であった。SCSなどでの議論に参加した経験はあったものの、インターネットを活用した中継は初めてであったので、期待と不安が交錯する中、当日の授業に臨んだ。

当日参加した学生に授業終了後に感想を尋ね、概ね【表1】のようなコメントをもらった。

事前に知識として知っていたものを実際に体験したことに対するコメント

- ・ 私は教育学部だということもあり遠隔授業などよく耳にします。まだ遠い存在だと思っていましたが、こんなに身近に体験できるとは思っていなかったため正直驚きました。(教育学部3年)

遠隔講義のメリット・デメリットに対して考察を加えたコメント

- ・ マイクで受け答えができるのはいいですが質問はしにくそうだなと思いました。カメラの調子もありますが実際に見ているほどの効果はあがらないと思うのでパワーポイントの画面を直接送れるといいのではないかと思います。ただ、教授の顔が見えなくなるので味気ない授業になるかもしれませんが・・・(工学部1年)
- ・ この授業については正直落ち着かなかった。しかし音声さえよければ便利であり、これからはどんどん活用すべきだ。(工学部3年)

教育方法としての「新鮮さ」を表現したコメント

- ・ とても楽しかったし、ためになった。また変わった授業をやってほしい。(工学部3年)
- ・ 遠隔授業は目新しく感じた。マイクに雑音が入ることが気になった(環境科学部3年)。
- ・ 遠距離授業は真新しく感じた。(環境科学部1年)
- ・ 今日の授業の感想として、初めて通信授業をうけた。初めての経験でなかなか面白かった!! また機会があれば、またうけてみたいなと思いました。(工学部1年)

「授業形態」(遠隔講義)として認識しているコメント

- ・ 今回この教室にいない人でも授業が受けられることはすごいと思いました。とても面白い授業の仕方だと思います(工学部3年)
- ・ 遠距離から講義を受けられるのはいいことだと思うけど、現場とはなれた場所と同時に講義するのは、多少無理があると思う。(工学部3年)
- ・ 中継による授業はなかなかいいと思う。遠くの大学の授業を学びやすくなるだろうと思う。(工学部1年)
- ・ とにかく前の授業などで一言断っておいてほしかった。いきなりだったので非常に驚いた。それはそれとしてかもめ広場をつかって公開授業というのはちょっと面白い発想かもしれないと感じました。(環境科学部3年)

【表1】「ながさき IT フェア」遠隔講義(2003年10月17日実施)に対する学生の反応

本稿では、全学教育人文社会科学科目「社会と歴史」の授業実践研究を進めている立場から、今回の経験をふまえて考えたことなどをまとめてみた。

教養教育における「思考」－全学教育人文社会科学科目「社会と歴史」授業実践研究の立場から

(1)授業デザイン－歴史的思考の枠組み

遠隔講義システムや e-learning への言及をする前に、まず筆者にとって活用の前提となる全学教育人文社会科学科目「社会と歴史」の授業デザインについてまとめてみる。

長崎大学全学教育の人文社会科学科目「社会と歴史」には、以下のような科目目標がたててある。

われわれの社会がどのような仕組みを持っているのか（法・経済・政治・文化・民族など）、またどのように形成されてきたのか（歴史的及び地理的）、そしてその中で生活を営む諸個人は社会とどのような関係を取り結んでいるのか、あるいは取り結んできたのか。

この科目では社会の構造と機能、及びその変動に主たる問題関心を置き、社会そのものを時間的・空間的・構造的に理解する能力を養う。

（長崎大学『平成 15 年度全学教育学生便覧』 P.3 より）

【表 2】 全学教育人文社会科学科目「社会と歴史」の科目目標

教養教育の人文・社会科学分野において教育上目指されることは、戦後新制大学のシステムが導入され、一般教育(general education)が行われるようになった頃から本質的には変わっていない。例えば、一般教育のあり方について初めて具体的なモデルを提示した『大学に於ける一般教育——一般教育研究委員会報告——』（1951年9月）には、一般教育における人文科学及び社会科学分野のそれぞれの特色を以下のように提示して、ディシプリンの基礎を修得することより、人間性の探求や開発、価値判断、予見といった学生の「思考の獲得」を重視していることが分かる。

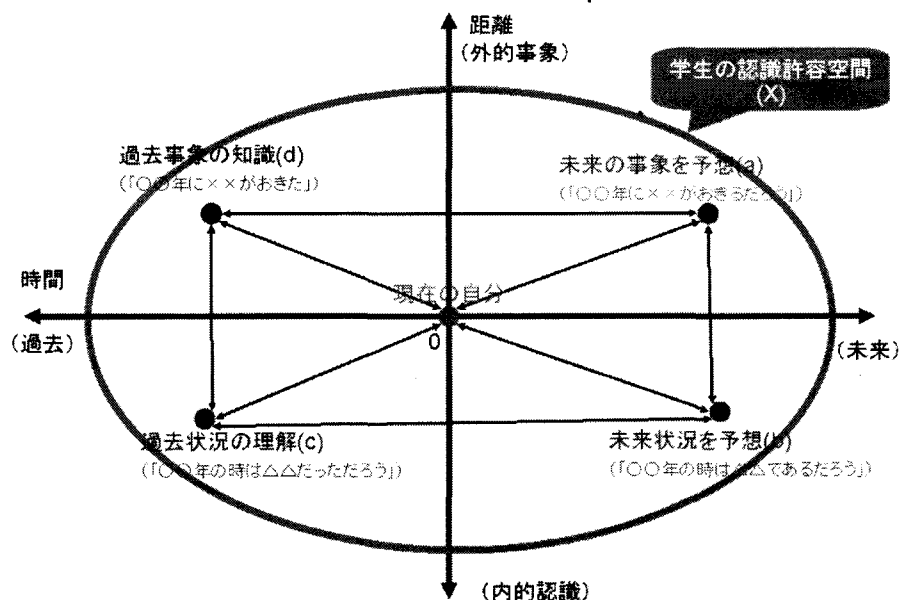
いま人文科学を、他の二部門即ち社会科学と自然科学とに対比して、総括的に云うならば、その本質乃至特色を第一に人間性の探求と開発という点に認めることができるであろう。もちろん、社会科学も、自然科学すらも、人間性の探求又は開発とは決して無関係ではないが、人間性そのものを直接研究対象とし、しかも之を内面的に深く且つ多方面に互って追求し、又は開発する点では、何と云っても人文科学が最も著しいと見得るであろう。…（中略）…。第二に、価値判断ということが、人文科学の本質的特色に数え得るであろう。尤も価値判断ということも他の二部門にみられぬわけではないが、真・善・美・聖というような高い人生価値に広く互って之を直接探求し、又この種の価値判断力を開発する点で、やはり人文科学が優れているということは否定できない。而して人文科学の多くに通ずる価値判断の特色として、個性の価値が強調されているということも見逃され得ない。…（以下略）。¹

社会科学は、人間が理性的動物として存在し行動することを中心として研究してゆく学問である。従って人間の価値とその目的とを無視した社会科学はありえないであろう。この点、自然科学が自然法則を取扱う場合と異なるのである。このような点を考慮するとき、たとえば歴史を取扱う時には常に価値に関連づけて、人間が自ら形成した社会集団において、如何に行動すべきかに及ぶと共に、過去にはどうであったかを見、将来にはどのように行動すべきかを予見することになる。社会科学の価値はこのようなところにあるのである。従って教授法においても、かゝる成果をあげ得るようにヒストリカル・アプローチを用いるか乃至は併用してゆくことが効果あるものとして望ましいであろう。…（以下略）²

また最近の教養教育カリキュラムモデルの研究としては、慶応義塾大学経済学部の羽田功教授を

中心として組織された教養教育研究会が提案した『教養教育グランド・デザイン—新たな知の創造』(文部科学省 2001-2002 年度委託研究報告書)がある。その中では、「文化知」・「社会知」・「科学知」という知の領域は、「従来の人文科学、社会科学、自然科学にほぼ対応する知の領域」³と定義されているが、こうした「知」を基盤として統合・継承・再構築・創造の4段階のレベルに体系化し、それを教養教育のゴールとしている点が注目される。このカリキュラムモデルは教養教育を学士課程全体の枠組みとして捉えているため、学士課程を全学教育と専門教育に分けている長崎大学の現状にそのまま適用することはできないが、少なくとも、教養教育が行う知的活動のうちで、知を用いた思考の形成にモデルの本質を置いていることは示唆に富むものと言ってよい。すなわち、新制大学初期の教養教育カリキュラムモデルであれ、最近のそれであれ、学生がどのように思考すべきか、その枠組み(フレームワーク)のトレーニングが、専門教育とは決定的に異なる教養教育の位置づけと定義される。

この授業では、上記のような教養教育モデルに意図されている内容と【表2】に掲げられている長崎大学全学教育人文社会科学科目の科目目標から、【図1】のような学生が学習活動として経験すべき思考モデルをたて、具体的に【表3】のシラバスを組み立て、学生に初日の授業(2003年10月3日)に提示・説明した。



【図1】「社会と歴史」における歴史的思考のモデル

授業の中で最も学生に期待した知的活動は、過去事象の知識(d)を講義で習得することではなく、過去の事象から未来を予想(a)したり、過去の状況を様々な事象から構造的に判断し理解(c)すること、そして、未来の状況をも構造的に予想(b)できることであった。さらにその思考過程が上記(a)から(d)の各要素間への移動の連続性を意識しながらなされることで、歴史的思考(Historical thinking)が現在の自分の価値判断のフレームワークとなるようにトレーニングすることを目指した。例えば、「現代社会におきている問題がいつおきはじめ、それがどういう背景によるもので、今後どういう可能性がありうるか」という思考は $0 \rightarrow d \rightarrow c \rightarrow a$ (or b)という過程をふんでいることになる。また(c)や(b)の内面認識の具体的対象を可変的にとらえることによって、『社会』はこうなるだろう(こうなっただろう)、『私』はこうなるだろう(こうなっただろう)というような幅のある状況判断をすることが期待できる。これらの思考が自分の現状とを相対化し、価値判断あるいはその根拠を修正する機能として学生に思考してもらうことを目標とした。

<p>【授業の目標】</p>	<p>みなさんは長崎大学を他の人に説明するとしたら、どのように説明しますか。この授業では、長崎大学を社会との接点から歴史的に説明できるようになることを第一目標とします。まずはみなさんの所属している長崎大学は歴史的にどういう役割を担って設立され、社会とどのような関係のもとで発展してきたのかを理解していきましょう。</p> <p>また、今この瞬間にも長崎大学の歴史は創られています。長崎大学で今学んでいるみなさんは、新しい歴史が作られている瞬間と全く同じ時間に学生生活を送っています。長崎大学史を創っている一員として、今後の大学生活を通してどういう人物として将来社会との接点になっていくと思うか、自分なりに言えるようになることをこの授業の第二目標とします。</p> <p>この授業は長崎大学から社会をみつめ、そして自分自身をみつめる時間にしていきます。</p>
<p>【教科書】</p>	<p>授業の最初（第2週）に教材（コースパケット）を配布します。利用授業はコースパケットに沿って進行していきます。</p> <p>また、インターネットの環境も併用して授業は進みます。</p> <p>参考図書は授業中に適宜示していきます。</p>
<p>【参考資料・文献】</p>	<p>参考図書は授業中あるいはインターネットで適宜示していきます。</p>
<p>【成績評価の方法】</p>	<p>【評価の対象となるもの】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の中間部（11月14日）に出される中間レポート(40%) ・ 授業終了後（1月30日）に出される最終レポート（40%） ・ 授業内での発表、ディスカッション（20%） <p>【評価の観点】 （レポートについて）</p> <p>この授業は目標にも書いてあるように、歴史の知識を「覚える」のではなく、歴史の知識を「使って」自分の考えを明確に述べることを最も重視します。</p> <p>このことをみなさんに実現してもらうために、上の2つのレポートは以下の観点から評価をします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業で得た新しい知識をもとに、自分の考えを述べているか。（30点） ・ 文献資料やインターネットなど、いろいろなメディアの情報を加えて工夫された内容になっているか。（20点） ・ 授業やインターネット上でディスカッションした他の人の考えを考慮して自分の考えを述べているか。（20点） ・ レポートの論理展開に一貫性があるか（10点） <p>（発表やディスカッションについて）</p> <p>ここでの発表やディスカッションは、これまでの授業で学んできたことを応用できているかを重視します。また、インターネットでのディスカッションへの参加についても重視します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業時間内での発表の際、自らの意見を分かりやすく伝えるような工夫がなされていたか。 ・ インターネットでのディスカッションに積極的に参加しているか。 <p>（双方で20点。どちらにどの程度の配点ウェイトを置くかはみなさんで選択してもらいます）</p>
<p>【履修条件】</p>	<p>特にありませんが、「教養セミナー」で学んだプレゼンテーションやレポートの作成法、あるいは「情報処理入門」で学んだ（あるいは同時進行で学んでいる）ことなど、これまでの学習経験を活かしながら授業に臨んでください。</p>

【注意事項】	この授業ではこれからの大学の授業で拡大していくインターネット空間を活用した学習（e-learning）を積極的に活用していきます。授業時間内だけではなく、授業時間外の家や、学校内のパソコンがある部屋で、短い時間でも自分のペースで議論に参加して下さい。パソコンに自信がない！という人も、これをきっかけに少しずつ慣れていき、楽しみながら授業に参加して下さい。
--------	---

日付	内容
10月3日	第1部：日本近現代史と長崎大学の発展過程との関係を考えよう ・授業内容の説明 ・イントロダクション：長崎大学の理念と「シブマーク」
10月10日	・文明開化と日本型大学システムのはじまり－幕末～明治20年代－
10月17日	・九州「帝国大学」争奪戦－明治30～40年代－
10月24日	(e-learning week①) ・帝国主義国家としての高等教育システムの展開－大正～昭和初期－ (インターネットで授業配信をします。これをみた後に、指定された課題を指定日時までにクリアして下さい)
10月31日	・戦時体制の中の高等教育－昭和10年前後～昭和20年－
11月7日	(e-learning week②) ・高度経済成長と新制大学の役割－昭和20年～昭和後期－ (インターネットで授業配信をします。これをみた後、指定された課題を指定日時までにクリアして下さい)
11月14日	・情報社会、新たな役割を模索する大学－現代－ (中間レポート：長崎大学と社会とのつながりを、歴史的な見方からまとめてもらいます)
11月28日	第2部：各学部と社会の接点を歴史的な観点から考えよう 日本社会の中から見た各学部のあゆみ(1)
12月5日	日本社会の中から見た各学部のあゆみ(2)
12月12日	国際社会の中から見た各学部のあゆみ(1)
12月19日	国際社会の中から見た各学部のあゆみ(2)
1月9日	地域社会の中から見た各学部のあゆみ(1)
1月23日	地域社会の中から見た各学部のあゆみ(2)
1月30日	総括ディスカッション：2014年の長崎大学を考える (最終レポート：自分の所属する学部の位置づけを歴史的な観点でおさえながら、自分が長崎大学で今後何を学び、どのような社会の一員として活躍していこうと思うかを述べてもらいます)

【表3】「社会と歴史－長崎大学からみる日本近現代」シラバス(平成15年度)

(2) e-learning 空間の活用

さてこの授業では、シラバスにもあったように、e-learning の環境を用いて授業は進められた。具体的には、大学教育機能開発センターで運用しているプラットフォーム「WebCT」日本語版(ver. 3.8)を用いて、授業時間外の学習や講義資料、学生からの提出物の受け渡しや一部の提出物の結果の公開、学生間・教員－学生間のコミュニケーションやディスカッションを行った。WebCT における詳細な授業実践内容については別の機会で述べることとして、ここでは、e-learning

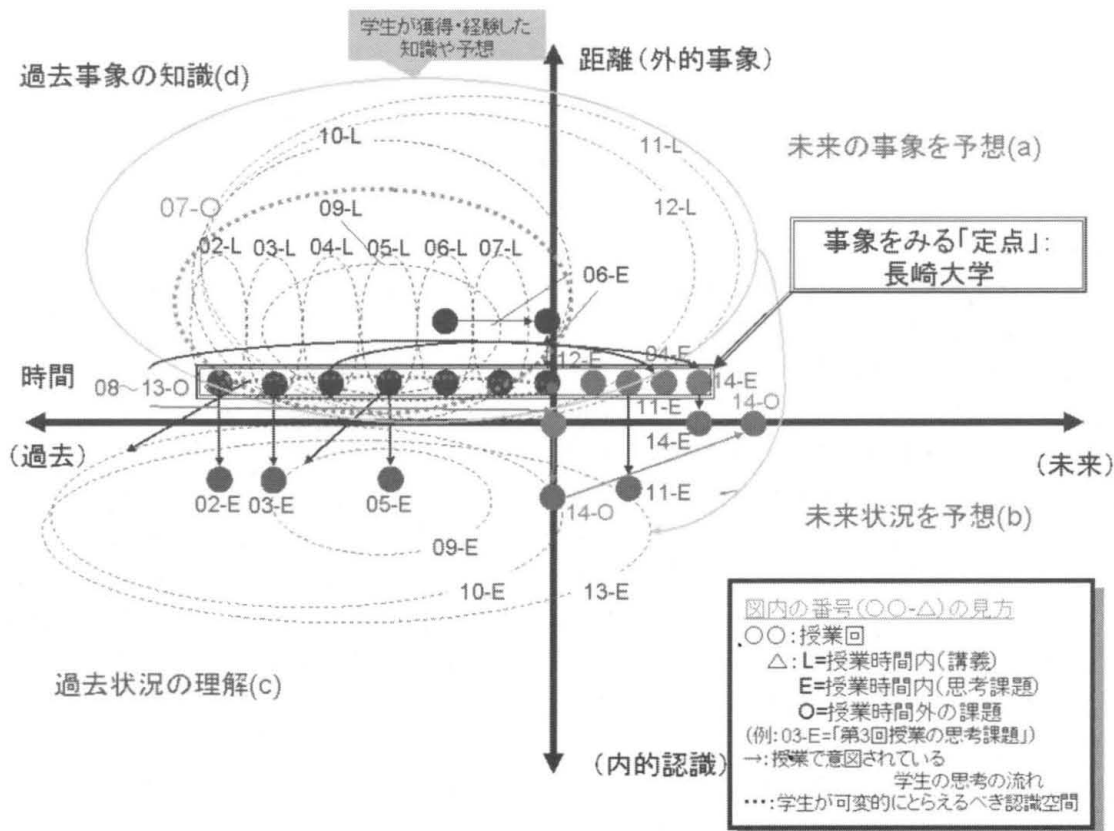
を用いて授業における学生の歴史的思考のトレーニングをどのように設計・実践したかについて述べておく。

授業各回の終了時に、学生には講義を聞いたうえで関連テーマを与え、講義内容の簡単なまとめのほかに学生個人の考えをあわせてパソコン上で記入してもらい、WebCT上で提出するという思考課題を出すことにしていた。そのテーマの一覧は以下の【表4】のとおりである。

回(日付)	思考課題テーマ
第2回(10/10)	なぜ長崎は「日本型大学システム」の中心になれなかったのか？
第3回(10/17)	なぜ長崎は「帝国大学」ではなく、実業専門学校だったのだろうか？
第4回(10/24)	長崎大学はこれから何かの「拠点」になれるか？
第5回(10/31)	私たちは戦時期の長崎大学前身諸学校の役割をどう考えればいいのか？
第6回(11/7)	九州各県の国立総合大学（長崎大学以外）をホームページで調べて <ul style="list-style-type: none"> 各大学が旧制のどのような学校を合併して、どのような学部が設置されたか（昭和24年当時）を図にしてみよう。 現在の各大学がどのような学部構成になっているかを調べて、昭和24年設置当時とどう違うのかを比較し、簡単に説明してみよう。 長崎大学の現在の学部構成と九州の他の国立総合大学の学部構成とを比較してみて、長崎大学の学部構成には九州各県の総合大学と比べてどのような特徴があるか、自分の言葉で述べてみよう。
第7回(11/14)	（中間レポート：長崎大学と社会とのつながりを歴史的な見方からまとめる）
第8回(11/28)	自分の所属学部の自慢しまくりテーマ提出
第9回(12/5)	教養部って結局何だったんだろう？
第10回(12/12)	長崎大学も含めて、日本では学部と大学院ってどう違うのだろうか？
第11回(12/19)	長崎大学はどのような大学評価を受けるだろうか？
第12回(1/9)	長崎大学では地域貢献型産学連携として、どんなことができるだろうか？
第13回(1/23)	1. 大学での公開講座はどのような背景で始められ、現在ではどのような役割を果たし、これからどんな役割が期待されると考えますか。 2. 長崎大学で実際に行われた公開講座の内容は、どのような理由から提供されたと思いますか。具体的な公開講座を1つあげて、地域という言葉を必ず用いて書きなさい。
第14回(1/30)	<ul style="list-style-type: none"> 「自慢しまくりテーマ」の発表 2014年の長崎大学はどんなものになっているか 自分はどう関わってみたいか （最終レポート：自分の所属する学部の位置づけを歴史的な観点でおさえながら、自分が長崎大学で今後何を学び、どのような社会の一員として活躍しているかと思うかを述べる）

【表4】 学生に対する授業時間内における思考課題（（ ）内は中間・最終レポートのテーマ）

【表4】の課題と、【表3】の授業時間内での講義とを組み合わせた授業デザイン上の歴史的思考過程を【図1】の枠組みモデルに準じて作成すれば、【図2】のようになる。



【図2】「社会と歴史—長崎大学史からみる日本近現代」の歴史的思考過程モデル

【図2】のモデルにあるように、この授業ではいくつかの段階を経ながら、【図1】の思考モデルに接近することを想定している。

まず第1段階として長崎大学史におけるトピック的な事象と、それに関連する社会的背景を連続的に学んでいく時期(02-L~07-L)がある。ここで過去事象の知識(d)から類推して過去状況の理解を深めたり(c: 02-E、03-E、05-E)、過去の出来事から未来の事象を予想する(d→a)という基本的な思考のトレーニングをこの時は行う。

第2段階は、長崎大学とそれに関連する社会的背景に関する過去事象を広く捉えることを整理したうえ(07-O)で、広さを確保したまま過去状況の理解や未来の予想を試みる段階である。例えば、第12回の講義(12-L)は、産学連携に関する歴史を、アメリカ州立大学や法整備の観点、わが国の産学連携政策の展開、そして長崎大学で実際に行われている産学連携に至るまでを講義で学習する。そして長崎におけるTLO設立のことから将来長崎大学がどのような産学連携の実績をとり得るかについて、インターネット等を活用して学生が様々なアイデアを出す(12-E)へと展開していく。このように、事象をみる定点として長崎大学はありつつも、学生は世界的な大学の過去動向から、未来を予想するように学習は展開されていく。

第3段階は、講義を聴いて得た情報を知識として獲得する学習活動とは全く逆に、これまで獲得した知識や将来の予想などをもとに、自分で情報を収集しながら過去の状況とその背景、現状と将来に至るまでを類推し、書き上げていく活動である。具体的には、生涯学習をキーワードにして、大学で行われている公開講座がどこでどういう理由で始まり、長崎大学ではどのように行われ、これからどうなっていくか(いくべきか)までを自らの力で作成していく(13-E)。実際に学生はアメリカ州立大学やわが国の私立大学などの公開講座の原点と言うべき事象を調べ上げ、長崎大学で行われている公開講座のテーマから、なぜ当該学部が公開講座のテーマとして設定したのかを、社会的なニーズや大学(学部)が置かれている現状などから類推して書き、今後公開講座がどのような役割を果たすべきかについても記述

して提出している。

そして第4段階で、初めて「自分」との関わりについて思考をすることになる。例えば、2014年の長崎大学はどうなっていて、それに自分はどうか関わっていたと思うか(14-E)や、長崎大学で自分は今後何を学び、どういう社会の一員になりたいと思うか(14-O)などはそれにあたる。

(3) e-learning のメリット

上記のような授業デザインで e-learning を用いて授業を実践して感じたことは、学生の思考がどのように動いているかを提出物などですぐに把握することが可能なことにある。例えば、ある学生が【図2】の05-Eの思考課題を提出した結果をみると、05-Lの授業内容をふまえた回答を寄せておらず、自らの考えだけを書いていたとする。その際には、すぐさま WebCT 内の e-メール機能を使って、そのことについての修正を求めるコメントを出すことができる。

また、クラス全体の認識のズレを把握し、授業内でそれを修正することも可能である。例えば、長崎が熊本・福岡と行った帝国大学誘致になぜ敗れてしまったのだろうか、という03-Eの思考課題について、ほとんどの学生が「福岡が長崎より大都市だったから」と回答してきた。ところが当時の九州最大都市は長崎市であって、学生は現在の常識から類推していることが把握することができた。そこで急遽 WebCT に国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」⁴と長崎大学附属図書館の「古写真コレクション」⁵にリンクを貼り、そこから100年前の人口統計表と現在の人口統計表、及び古写真の様子から長崎市が100年前どのような位置づけをもった街であったかを確認してもらう時間を設定した。学生の多くが、長崎が当時九州最大の都市であったという事実をこの時初めて知ったのである。このように、講義を一方向で淡々と続けた場合には見落としがちな学生の認識をすばやく把握し、修正できるのは大きな意味がある。

さらに歴史を学ぶ場合に、e-learning はとても重要な役割を果たす。歴史は、個人が生存している期間より以前のことはどんな状況であっても直接経験をすることができない。したがって現実空間で学ぶことが極めて限定されるものである。ところがテクノロジーの発達によって、様々な史資料をもとに当時の状況をできるだけ忠実に再現する「仮想空間」(virtual reality)の構築が可能になった。歴史を学ぶ立場からすれば、遺構だけではない可視的な空間で過去の実態を把握する機会が増えたことになり、時間的な代理経験と、仮想空間における直接経験の距離が一気に縮まった。伊藤と宮本はメディアの発達に伴って直接経験による学習が減り、代理経験によって「見た」ものから学ぶ学習が増えている状況を、『『逆』経験の円錐のような状況にある』⁶と表現しているが、歴史学習に関して言えば、仮想空間における直接経験の増大は、文献解釈に依拠したものとは異なる全く新しい学習空間を提供しており、学習者にとってもアクセスのしやすい学習媒体であると言える。

(4) 遠隔講義システムの活用可能性と課題

今回の「ながさき IT フェア」の経験では、中継の依頼を受けてから授業実践に至るまでわずか一週間しかなかったため、遠隔講義システムの有効な活用が準備できずに残念であったが、仮にこれまで紹介してきた「社会と歴史—長崎大学史からみた日本近現代」で今後も活用できるとしたら、どのような可能性が考えられるかについて多少の考察を加えてみたい。

まず、【図1】及び【図2】の歴史的思考モデルで考えた場合、思考をするうえでそのままでは実現できない場所がある。それは横軸が0で、縦軸が正に向かう位置である。すなわち、全く同時刻で距離が離れた場所について思考することは、学習者が存在するその場しか直接経験の機会は与えられないので、できないのである。しかし、この遠隔講義システムを利用すれば、長崎大学と、数キロ離れた JR 長崎駅前かもめ広場が生中継で結ばれたように、同時刻の異なる空間がどうなっているのか、ということを見ることができる。これは先述の代理経験が、タイムラグなしで実現できるということであり、思考を試みるうえでの唯一の「デッドゾーン」が解消されることを意味する。【表1】の中で「遠くの大学の授

業を学びやすくなるだろう」というコメントをした学生がいたが、例えば、同じような思考の枠組みで学んできた異なる大学の学生間で、特定のテーマに対するディスカッションをしたりすることが可能である。

もう一つはこれに関連して、講義形式の授業や e-learning で陥りがちな直線的な学習とそれに伴う認知プロセスを、遠隔講義システムを用いることでタイムラグなしで検証し、多様な観点からの認知に拡大することができる。講義形式の授業では、双方向型の授業形態をとらない限り、教員の講義内容が直線的に学生に伝わる。クラスサイズが大規模になればなるほど、双方向性授業の機会は減少し、学生は授業で示された講義内容以外に学習範囲を拡大することなく、したがって限定的な学習活動をしてしまいがちである。また e-learning も、講義をビデオで配信し、それを学習者が見て、テストに答えるといったような学習活動に陥りがちで、これはしばしば、対面型の伝統的な学習に対する決定的な短所と指摘されてきた。しかし、遠隔講義システムはライブであるため、必ずしも一方通行の学習になるとは限らない。相手に対して質問もできるし、代理経験型の学習をより前面に出せば、学習者が抱いている疑問を直接中継先の人を確認し、回答をリアルタイムで伝えることもできる。このように同時刻で距離の離れた空間がつながることは学習者の思考を促す空間を演出するために大きな役割を果たしているのである。しかも、衛星回線のように高コストな環境ではなく、インターネットを利用した低コスト環境でこれが実現されるということは、それだけ学生への提供機会が増えることを意味し、大変意味のあることと言える。

ただ問題は、これを多様な学習ニーズに対応できるような戦略的プランニングがどれだけなされているか、ということであろう。単にシステム導入という側面だけではなく、先述したように、多様な授業デザインで多様な要求が出た時に、それに柔軟に対応しうる組織・資源（物的・人的）が整えられているか、ということは、e-learning を積極的に推進するうえでは早急に解決すべき課題であろう。1つの e-learning コンテンツ開発をするためには、授業デザイン・教材作成（取材・多様なメディア（印刷教材・映像教材など）への配慮）・コンテンツ編集・システムエンジニア・情報リソース等、多様な役割を果たすべき組織及びスタッフが必要である。今回の「ながさき IT フェア」での経験でも、総合情報処理センターのスタッフ各位が事前の準備に奮闘している姿を目の当たりにした。こうした努力が長崎大学全体の組織的営為となるような体制づくりを望みたい。

1 大学基準協会「人文科学」『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』昭和二十六年（1951年）九月、p.1-2

2 大学基準協会「社会科学」『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』昭和二十六年（1951年）九月、p.2

3 教養教育研究会『教養教育グランド・デザイン—新たな知の創造』（文部科学省 2001—2002 年度委託研究報告書）、p.15

4 国立国会図書館 web サイト (<http://www.ndl.go.jp/>)。電子図書館「近代デジタルライブラリー」には明治期刊行図書を画像データベースで見ることができる。長崎大学関連でも、『官立長崎師範学校規則』や『長崎医学専門学校一覽』『長崎高等商業学校一覽』など、前身諸学校の貴重な資料を簡単に見ることができる。

5 長崎大学附属図書館所蔵電子化コレクション web サイト

(http://www.lb.nagasaki-u.ac.jp/old_pic/index.html)。なかでも「日本古写真超高精細画像データベース」は特に精密な古写真の電子化データベースである。

6 伊藤秀子、宮本友弘「映像メディアによる新しい学習の展開」『フレキシブル・ラーニングのための学習支援と評価(I)』メディア教育開発センター研究報告 41 号、2003 年 2 月、p.7。「『逆』経験の円錐」とは、Dale が 1969 年に提唱した教材が学習者に与える経験を「経験の円錐 (cone of experience)」としてモデル化したものが、近年逆の形になっているということであらわしたものである。具体的に言えば、「経験の円錐」では直接的・目的的体验が学習者に対して具体性をもった、経験の頻度の多いものであったが、近年は映像メディアの発達によって、世界各地で起こっていることを衛星中継で同時に知ることができたり、直接経験したことのない自然現象を映像で見ることができるようになるなど、直接的・目的的经验の頻度が減り、間接的な情報から学習する機会が増えていることである。